

宇治群島 2005 年 5 月の昆虫相調査を行って

坂巻 祥孝
鹿児島大学農学部

On the insect faunal survey of Uji Islands in May 2005

SAKAMAKI Yositaka

Faculty of Agriculture, Kagoshima University

2005 年 5 月 10 日の宇治群島家島上陸では、スケジュールの都合から夜間の灯火採集ができなかったものの、日中のみの調査で 12 目にわたる昆虫を採集できた。現在これらの昆虫標本はそれぞれの昆虫群の専門家に送付し分析を依頼するために仕分け中であるが、推定で 12 目 40 科 70 種以上が採集できたものと思われる。これらのうち、シミ目、シロアリ目、アザミウマ目は、宇治群島でこれまで採集記録のないものであった。また、分布記録として特筆すべきであったのは、今回未だ種名は不明であるが、ゴキブリ目の幼虫でムカシゴキブリ科ルリゴキブリと酷似した種が採集できたことである（写真 1）。ムカシゴキブリ科は東南アジア熱帯を中心に分布するグループでわが国からは 2 属 2 種が知られているが、今回採集できた幼虫が属する *Eucorydia* 属ではルリゴキブリ *Eucorydia yasumatsui* Asahina が西表島と石垣島に分布するのみと言われている。地理上、八重山諸島と本島は大きく隔離しており、今回採集できたムカシゴキブリ科 *Eucorydia* 属の幼虫がルリゴキブリであるか判断するには、今後の詳細な検討だけでなく、あらためて成虫採集する必要がある。



写真 1

筆者の研究対象である鱗翅目については、10科10種が得られている。これらのうちスガ科、ヒゲナガキバガ科、マルハキバガ科、ホソガ科、コハモグリガ科の小蛾類の5種が本島新記録であったが、いずれの種も鹿児島県本土と共通種であり、分布上特筆すべき種は採集できなかった。しかし、これらのうちスガ科のコナガ *Plutella xylostella* (Linnaeus) が島中の至るところで、スーピング（植物に向かって無作為に捕虫網を振る調査方法）を行うたびに数頭ずつ捕獲され、本調査期間中極めて高密度で成虫が生息していたことになる。本種は汎世界的に分布する著名な害虫で、幼虫はアブラナ科植物にのみ依存し、鹿児島県本土では、ほぼ1年中見られるごくありふれた害虫である。これまでの宇治群島の昆虫相調査で捕獲されていないことがむしろ不思議なくらい普通に採れる種である。しかし、家島の過去の植物調査記録を紐解くと、アブラナ科植物は迫・丸野ら（1988）の調査でマメグンバイナズナ *Lepidium virginicum* Linnaeus が採取されているのみで、それ以前もその後もアブラナ科植物の記録は無い。したがって、寄主植物がないため、これまでの昆虫相調査ではコナガが採集されてこなかったものと思われる。われわれの行った調査時にも島内でアブラナ科植物葉観察されていない。したがって、今回観察された大量のコナガは家島以外の土地で育ち、高密度で寄主植物のない家島に飛来したものと考えられる。コナガは熱帯原産といわれており寒さに弱いにもかかわらず、毎年春先から東北地方や北海道でも確認されており、片道切符の長距離移動をする昆虫と言われている。成虫寿命は飼育環境下でも1週間程度である。よってこの調査日直前数日間の気象条件や風向き、その他を考え合わせることでコナガの長距離移動を解く手がかりになる

かもしれない。

引用文献

迫静男・丸野勝敏、他、1988. 宇治群島の植物相. 鹿児島大学農学部演習林報告.
16 : 83-105.